

彼氏のお兄さんとえっちしちゃったら、
彼氏と 3P することになった話

Sample

名塾

◆ 彼氏のお兄さんといっちなことをする話

「奏乃、今日うち来ない？」

「史斗の家？」

「母さんが昨日ケーキ焼いたから、奏乃呼んでみたらって」

「やったあ、史斗のお母さんの作るお菓子好き！ 行く！」

「母さんも夕方帰ってくるから、ご飯食べてく？」

「いいの？」

「うん、母さんもそのつもりで買い物して帰るって」

史斗の家はご両親とお兄さんの四人家族で、史斗のお母さんは「女の子が来られると楽しい」と、お菓子を作ると今日みたいに誘ってくれる。

史斗のお父さんは出張が多くて会ったのは数回だけど、優しい人な人で、喋り方が少し史斗に似ている。

それから三歳上の史斗のお兄さん——柊哉さんは、史斗から『今まで歴代彼女は思い出せないくらいたくさん見てきた』というのはい聞いたことがある。今は彼女を作っていないそうだけど、話し方が優しいし、どこか余裕のある雰囲気とか確かにモテそうっていうのは、なんとなくわかる。

そんな柊哉さんとは反対に、史斗は少し恋愛には不器用だ。付き合っただけは手繋ぐのもぎこちなかったけど、数ヶ月前に初めてえっちをしてからは、互いの距離が縮んだような気がする。

「お母さんに史斗の家に行くって連絡しておくね」
「ん、じゃあまたあとで」



「おかえりー…、あ、奏乃ちゃん」

史斗の家に着き、史斗の後ろに続いて玄関に上がると、リビングから柊哉さんが顔を覗かせた。

「兄ちゃん、今日バイトじゃなかった？」

「シフト代わった。…あ、俺どっか出かけたほうがいい？」

「別にいいよ」

「ほんと？　うち、壁薄いよ？」

「ばっ…、何もしねーから！」

「あらあら、史斗くん怖い」

二人のいつものじゃれ合いに、思わず笑ってしまう。柊哉さんは、よくこうやって史斗のことをからかうけど、史斗のことが可愛くてかまっているんだらうなと思

う。史斗も口でこそ言わないけど、二人が仲良しなのが伝わってくる。

柊哉さんは「奏乃ちゃん、ごゆっくり」と笑って、リビングへ戻っていった。

「……ほんとうるさくてごめん」

「ううん。仲いいよね、楽しそうでうらやましい」

「別にふつーだし……、なんか飲み物持っていくから、部屋行つてて」

「うん、ありがと」

史斗の部屋に入ると、くしゃりと足元に寄せられた、起きたままのタオルケットがすぐ目について、そういえば今日はギリギリに学校に来てたっけと思い出す。きつと寝坊したんだろうなと、慌てて飛び起きる史斗が目には浮かぶようだ。

さっとタオルケットを整えると、ふわりと史斗の匂いがして、この前来たときのことを思い出してしまった。柊哉さんもお両親も帰りが遅いからと、このベッドに押し倒されて、えっちしたこと。

あの日は……、数回目のえっちだったけど、なんだか二人とも盛り上がってしまった

て、結構声も出ちゃったりして……、イけなかったけど気持ちよかったな……なんてあれこれ思い出してしまい、お腹の奥が少しキュンとしてしまう。

（いやいや、今日はそういうことしないんだから！）

ベッドから目を逸らすように背を向けて床に座ると、何やらドタバタと一階が騒がしい。どうしたんだろう、と思っていたら、控えめにドアをノックする音がした。なんでわざわざ史斗がノックなんてと思いながら返事をする、ドアから顔を覗かせたのは、史斗ではなく柊哉さんだった。

「奏乃ちゃん、ごめんねー。あいつ、学校にスマホ忘れたみたいで取りに戻ったからさ、待っててやって？」

「えっ！ あつ、わかりました」

「ごめんね、せっかく来たのにね。ほんとあいつたまーに抜けてるところあるからさ」
「先月は帰る途中で気がついて、引き返したんですよね」

「マジで？ 片道結構かかんのにねー、明日学校が休みのタイミングで忘れるのも

あいつらしいよね」

そう言いながら笑う柊哉さんの声は優しい。笑う顔はやっぱり兄弟だから史斗と似ていて、だけど少し大人で、史斗も数年経ったらこんな感じなのかな？なんて思ったりした。

「ん？」

「あつ、やっぱり史斗と柊哉さんって似てるなって……、つい、じっと見ちゃってすみません！」

「あー、自分たちじゃわかんないけど、結構言われるんだよねー。そんなに似てる？」

「はい、笑った顔とか、特に目元とか」

「近くで見てる？」

「えっ?! あ、」

「……っはは、奏乃ちゃんかわいいーね」

「からかわないでください……!」

「ほんとほんと」

柊哉さんは私たちと三歳しか変わらないけどすごく大人って感じがして、そんな社交辞令にも顔が赤くなってしまう。恥ずかしくて、何か話題を考えると考えるけど柊哉さんと共通の話題なんてすぐに出てこない。そんな私を見透かしたように柊哉さんは笑って、そういうええと切り出した。

「今日も俺より早く起きたのに二度寝してたから起こしてやったら、ベッドから飛び起きて小指ドアにぶつけてうずくまってたわ」

「ふふ、やっぱり寝坊したんですね。すごい息切らして教室入ってきました」

「そうそう、脱いだものもベッドもぐちゃぐちゃのまま……、あれ？　もしかしてきれいにしてくれた？」

「あつ、勝手にすみません……！」

「いやいや、ありがとね、彼女呼んでおいて部屋も片付けてなくて……、あ」
「？」

視線はベッドのまま、柊哉さんの言葉が止まる。なんだろうと振り返ると、枕元

の封の空いたコンドームの箱が目飛び込んできた。

「……っ！」

「史斗戻ってきたら、やっぱり俺どっか出てよっか？ あ、母さん帰って来るの何時か聞いておく？」

「だっ、大丈夫です！ その、大丈夫なので！」

「っは、二回言わなくても」

その箱が、しかも枕元にあるだけで『この部屋でえっちしたことがあります』と言っているみたいで、恥ずかしすぎてどうしていいかわからない。柊哉さんは冗談っぽくして多分気遣ってくれたけど、柊哉さんの顔を見ることが出来ずに下を向いて、全く出て来る様子もない次の言葉を探す。

「……かわいいーね、奏乃ちゃん」

その声と一緒にあったらうか。ドアがゆっくりと閉まる音がした。

「恥ずかしくて涙目になっちゃってるじゃん」

「あっ……」

顔を上げると、すぐ隣には屈んだ柊哉さんの顔が近くにあって、ばっちり目が合う。史斗と似ている、少し茶色の目と。

「恥ずかしいついでに、もっと恥ずかしいこと教えてあげよつか？」

「えっ……？」

「奏乃ちゃんのえっちな声、俺の部屋にも聞こえてたよ」

一瞬、何を言われたかわからなくて固まっていると、柊哉さんが、ふっと笑う。

「この前、この部屋でやってたでしょ？　可愛い声、聞いちゃってごめんね？」

「えっ……?!」

「あ、ずっと盗み聞きしてないよ？　あの日もバイトのシフト代わって帰ったら

真っ最中だったから、空気読んでお兄さんはそーっと出かけました」

（うそ、そんな、聞こえてたなんて……！）

「奏乃ちゃんって、えっちしてるときの声も可愛いんだね？」

「やっ……、」

「いつもあんなに声出ちゃうの？」

「ち、違……っ」

「違うの？　じゃあ、あの日はいっぱいイっちゃったんだ？」

「イってな……、っあ……」

「えー？　イってないの？」

とにかく否定したくて言わなくてもいいことをつい口走ってしまい、最悪だ。恥ずかしくて顔が熱くて、この場から消えてしまいたい。そんな私をよそに、柊哉さんは話を続けた。

「史斗とのえっち、いつもイってないの？」

「……っ」

「黙るってことはそうなの？」

「それ、は……っ」

実際のところ、史斗とのえっちはイったことがある方が少ない。お互い初めてで、どうしたらイけるのかは私もよくわからない。それでも気持ちよくないわけではないし、史斗が気持ちよさそうならいいやつて思ってたのに。

「ちゃんと女の子もイかないと、楽しくないじゃんね」

「わ、私は別に、」

「奏乃ちゃんだって、いっぱい気持ちよくなりたいでしょ？」

そんなことない、と言えば嘘になる。でも、史斗にどう伝えていいかわからないし、不満に思っていたわけじゃなかったのに。

「気持ちよくなりたいって、悪いことじゃないよ」

近づく柊哉さんの顔、鼻を掠める、男の人の匂い。じっと見つめられるその目から、逸らすことができない。

「……ね、奏乃ちゃん、もしかして俺の顔もタイプだったりする？」

「えっ……、あ、」

「俺はね、奏乃ちゃんのこと結構タイプだったりするんだけど」

「か、からかわないでください……っ」

「ほんとなんだけどなあ」

そう言って、柊哉さんの指先が私の目尻に触れる。滲んだ涙を拭って浮かべた笑みに、どきり、と胸が鳴る。

「……っ！」

「もうちょっと、触ってもいい？」

頬に手が触れ、微かに耳に触れた指先に肩が跳ねる。触ってなんてだめなのに、じっと見つめられて、動けない。親指で唇をゆっくりとなぞられ、それだけなのに体の奥が甘くむず痒いような、まるでそんな、何か期待するみたいな、

「もしかして、俺とのえっち想像した？」

「……違っ、」

「違うのー？」

「柊哉、さん……っ」

「……史斗、あと一時間半は戻ってこないよね」

史斗と似ているその目が、似ているけど少し低い声が、全然違う匂いが、私を捕らえて離さない。

「お兄さんと、いいことする？」



「ブラ可愛いね、史斗の趣味？」

胸元まで制服のシャツをたくし上げられ、ブラ越しに大きな手が胸を包み込む。今日のは特にそういうわけじゃないけど、いつだったか付けていた下着を可愛いと史斗に褒められてから、似たようなものを買うようになった。黙る私を柊哉さんは笑って、やわやわと優しく揉まれば小さく息が漏れてしまう。

「ゆっくり見たいけど、今日は時間ないからねー……」
「あっ……!!」

慣れたような手であつという間にホックを外され、直接そっと包み込むように揉まれる。ただ掴むだけじゃなくて、時々撫でるみたいで肌が粟立つようだった。

不意に柊哉さんの指が胸の突起に触れたかと思うと、時折引つ搔くように弾かれ

て肩が震えてしまう。

「ここ、好き？」

「やあ……んん……っ！」

「ん、乳首好きなんだね♡」

摘まれ、擦られながら耳元でそう言われてしまい、反射的に首を横に振る。ふつと笑われてしまったから、柊哉さんにはもうそこが弱いことはバレてしまっていると思う。

「こっちおいで」と抱き寄せられて膝に乗せられると、柊哉さんの顔の前にぷるんと胸が揺れて、柊哉さんの呼吸が感じられるくらいに近い。

「奏乃ちゃん、シャツ自分で捲って持ってて？」

「えっ……?!」

「シャツ落ちてきちゃうから、ね？」

ほら、と急かされ、言われた通りブラごと捲り上げると、柊哉さんの口からちろりと赤い舌が覗く。触れそう、と思ったときには柊哉さんの口の中で転がされて声が漏れてしまっていた。

「あつ、あ……っ♡」

「ん、すぐ乳首硬くなってきてるね、可愛い♡」

「あん……っ♡！ それ、っああ……♡」

「舌で先っぽ舐められるのいいの？　っは、奏乃ちゃん、乳首ほんと好きなんだねー？　史斗に開発されてんの？」

「やあ……っ、あつ、あッ……♡！」

「ん、可愛い声出てきたね……♡　乳首気持ちいい？」

「んん……っ♡」

「乳首ビンビンじゃん♡　はあ……、ね、乳首だけでイけたりする？」

気持ちよさに耐えながらふると首を振ると、そっか、と柊哉さんは顔を離す。いけないことなのに、やめないで、という言葉が頭を過ってしまう。

「じゃあ、俺に開発されとく？」

「えっ、ああ……っ♡！」

さつきとは違って、優しく微かにだけ柊哉さんの舌先が乳首を掠めていく。舐めてほしいのに焦らすみたいで、反対の乳首も指の腹で僅かに掠めていくだけ。それがじわじわと気持ちよくて、だけでもどかしくて。

「あっ、やだ……っ」

「我慢したら気持ちよくなれるよ……、ほら、奏乃ちゃんの乳首ツンってすげー舐めてほしそう……♡」

「ん……っ」

「乳首早く舐めてほしいねー？ 乳首気持ちよくなりたいよね？」

「ん……っ」

「このままでもいいの？」

「や、だあ……っ」

「……やだよね♡ いーよ、乳首気持ちよくなるーね♡？」

「ああん……っ♡！」

ちゅう、つと勢いよく吸われたかと思うと、柊哉さんの口の中で乳首に舌全体が絡みつくように気持ちよくて、柊哉さんの肩を咄嗟に掴んでしまう。触られていないはずの腰が揺れ、乳首だけなのに下着が濡れている気がする。本当に乳首だけでイっちゃうかもしれない。だめ、だめなのに。

（乳首、だめ♡ 気持ちいい……っ♡）

「ひゃあん……っ♡！ あ、嘸んだらだめ、あつ、あ……っ♡！」

「ん、乳首嘸まれて、摘まれて、気持ちいいねー♡？ 触ってないのに、奏乃ちゃんのおまんこ、もう濡れてるもんね？」

「や……っ♡！」

おまんこなんて普段は史斗から聞かない直接的な言葉に、じわ、とそこが熱くなっ

た気がする。うそ、恥ずかしいのに、だめなのに、ひくひくとそこが気持ちいい。

「奏乃ちゃんの乳首、すげーえっちだからやっぱ乳首だけでイけそうじゃない？
ほら、ん……っ」

「あっ、両方いじっちゃだめ……、あ、あっ……♡！ イ、っちゃ、う……っ」

「ん、いーよ、我慢しないでイって♡？ 乳首だけでイきな？」

「やん♡ だめっ、ほんとにイっちゃ、う……っ♡」

「乳首ぎゅうってしょっか？ えっちな乳首、ぎゅー……♡」

「あっ、あああん……っ♡！」

両方の乳首をぎゅっと摘まれ、そう耳元で言われたと同時にだろうか、背中に何か
が走ってびくんと大きく体が震えた。あそこがひくひくと痙攣して、うそ、ほんと
に乳首だけでイっちゃうなんて……

初めての感覚に力が抜けてしまい、柊哉さんの体にもたれかかると、首筋から柊
哉さんの匂いをする。史斗と違う、もつと男っぽいような、香水と混じった匂い。

「はは、乳首だけでイけたね♡ かわいい♡」

「はあ……っ、あ……」

「休ませてあげたいけど、時間ないからね……、史斗のベッド汚しちゃまずいから、そっち向いて？」

言われるがまま、柊哉さんの足の間で背を向けて座り直すと、すぐに下着を脱がされてしまった。脱がされた下着の真ん中に染みが見えて恥ずかしくて閉じようとした足は、柊哉さんの足に引っ掛けられて大きく左右に開かれてしまう。

「やんっ……!!」

「だーめ、足閉じないの。閉じたら奏乃ちゃんのおまんこ、触れないでしょ」

「んん……っ♡!!」

肩に柊哉さんの顔が寄せられ、後ろから抱き締められて自分の力ではもう身動きが取れなかった。はしたなくM字に開かれた足は閉じることなどできず、柊哉さんの手が触れるのを待つだけだった。

「あぁん……っ♡！」

「わ、奏乃ちゃんのおまんこ、すっげーぐちゅぐちゅじゃん♡ 乳首そんなに気持ちよかった？」

「あぁん……っ♡」

「次からは史斗に触ってもらってもイけるかもね？ えっちな乳首になっちゃったねー♡」

「あっ……、やだぁ……っ」

「ん、ごめんね、今はおまんこ触って欲しいもんね？」

「違……っ、あぁん……♡！」

「違うの？ クリの方がいいの？ 奏乃ちゃんのクリよしよ……♡」

「あぁんっ♡！ それ、だめっ……♡」

「クリよしよしされるのも好きなんだ？ 奏乃ちゃん、えっちでわかりやすくてかわいーね♡」

指の腹で下から上へ何度も優しくクリを撫で上げられ、どうしようもなく気持ち

がよかった。空いた片方の手はまた乳首を擦るから声なんて我慢できなくて、手で口元を押さえ、ふうふうと息をするので精一杯だ。

「声出してもいいよ、まだ史斗帰ってこないし。俺も奏乃ちゃんのえっちな声、もつと聞きたいなー?」

「んん……ッ」

「んー、じゃあ声出してもらえるように、お兄さん頑張っちゃおっかなあ」

「……っ♡!」

クリを撫でていた指がそのまま下へ滑り、くちゅり、と音がした。柊哉さんの言う通りぐちゅぐちゅのそこに、拒むことなくあっさりと指が入ってしまう。それから、史斗のより長く骨張った指が何かを探すみたいに、ゆっくりと掻き回されていく。

「…っあ、ん、ああ……っ♡!」

「ここ?」

「んんっ、わかんな、ああんっ♡！」

「ここかあー……奏乃ちゃんの気持ちいいとこ、よしよししよーね♡ おまんこよし♡♡ よしよー♡♡」

「やあ……っ♡！ そこ、やつ……ああん♡！」

「あー……、おまんこぐちゅぐちゅって音すっご♡ ここ、奏乃ちゃんの気持ちいいとこだからね？ 自分でも覚えなないと史斗におねだりできないから、ちゃんと覚えて」

「あっん♡！ あ、やんっ♡ ああっ……♡！」

「ぐちゅぐちゅされて気持ちー？」

「んんっ、ああ……♡！」

「かわいいーね♡ ほーら、おまんこぐちゅぐちゅってされて、気持ちいいの？」

「っ、きもち、い、ああんっ♡ 指速くしちや、やらあ……っ♡」

（彼氏の部屋で、お兄さんにぐちゅぐちゅにされてるなんて……っ）

指の動きが速くなって、部屋に響く音も、漏れてしまう声も、恥ずかしくておか

しくなりそうだった。力無く柊哉さんの手に自分の手を重ねるけど、止めてくれるはずもなく、ぐちゅぐちゅと淫らに掻き回されてしまう。

「んー？ 嫌？ 速くされるの嫌なの？」

「あつ、だめ……♡！ そんなにしたら、イっちゃ、うからあ……っ♡」

「はは、またイきそ？ 我慢しないでいいよ、おまんこぐちゅぐちゅされてイきな？ ほら、おまんこイくイく♡ってできるよね？」

「あんっ♡ だめ、だめっ♡ ああんっ……♡！ イくっ、あっ♡ そこぐちゅぐちゅだめ……♡！ ああっ……♡」

「ん、おまんこぐちゅぐちゅってされてイくイくしよーね♡ ほら、イって？ 奏乃ちゃんのイく声聞きたいなあ」

（そんなにされたら、だめ♡ なんか来ちゃう……っ♡）

「ああんっ……♡ そこばかり、だめ、ああっん……♡！」
 「もうイきそー？ おまんこぐちゅぐちゅ気持ちいいね♡」

「あつ、あつ……♡ ああつ、ん♡ ぐちゅぐちゅ気持ち、い……っ♡ 柊哉さんっ、だめっ、もおイっっちゃう……っ♡」

「うん、おまんこイくイくして♡ 奏乃ちゃんのおまんこイくイくイく……♡」
「や、ああ……っ らめ、イくイく……っ♡♡♡！」

耳も犯されるみたいに気持ちよさに何も考えられなくて、大きく背中を仰け反ってイってしまった。こんなに気持ちいいのは初めてで、頭がふわふわしてくる。

「思いつきりイっちゃったねー……♡ すっごく可愛かった♡」

「ん、う……っ」

「おまんこ気持ちよかったね？ ほら、奏乃ちゃんので俺の手もびちよびちよ♡」
「やあん……っ」

目の前に広げられた柊哉さんの手のひらも指も濡れていて、指を動かすと透明な糸が垂れて、ぷつん、と切れた。目を伏せると、いったばかりの入口をなぞるように、再び柊哉さんの指が触れた。

(いったばかりで、だめなのに……っ♡)

「あんっ……♡!」

「はは、入口くちゅくちゅさされただけで声出ちゃう?」

「んっ、だって……!」

「この奏乃ちゃんのぐちゅぐちゅのおまんこに挿れたらやばそー♡ 俺もすぐいっちゃうかも」

「ああん……♡!」

「奏乃ちゃんも、ここにちんこ欲しくなってるの? ほら、指また挿れたら、すごい締め付けてくる♡」

「んん……っ♡」

「俺ももう勃ってんだけどねー、今日は挿れんのはやめとこっか? 浮気になっちゃうもんね?」

「……っ!」

浮気、という言葉にハッとして体が強張る。私、史斗の部屋で、こんな……

……わかってる、わかってるのに、
いけないことだって、わかってるのに、

「……代わりに、奏乃ちゃんのぐちゅぐちゅおまんこ舐めてあげるから我慢しよ？」

ひくん、と期待で中が疼いて溢れた。



クッションを頭の下に敷かれて、ゆっくりと押し倒される。史斗が戻って来るまであとどれくらいなんだろうと考える間もなく、柊哉さんがスカートの中へと潜り込んだ。

「もう自分で足広げて偉いね♡ おまんこそんなに舐めてほしい？ ふー……っ」
「あっん……！ 息、かけちゃだめっ……♡」

「っは、息吹きかけたただけでおまんこひくひくしてんの、おねだり？」

「んん……っ♡ 意地悪、いや、です……っ」

「はは、えーろ♡ じゃーあ、遠慮なくいただきます♡」

「ああ……っん♡！」

指でくば、と広げられたかと思うと、柊哉さんの舌がクリを舐め上げる。強い刺激に震える足は押さえつけられ、声なんてとっくに我慢ができなかった。

「あは、クリもう硬くなって舐めやすい♡ ほら、舌でチロチロって♡」

「やあんツ♡ あ、それすぐイっちゃう……っ」

「もうイけるようになってえらいね？ イっちゃっていいよ♡」

「あっ♡ あっ♡ そんなに舐めちゃ……っ、ああンっ♡ イく……っ♡！」

小刻みにクリを舐められ、呆気なくイってしまふ。なのに柊哉さんは顔をうずめたまま、濡れそぼる割れ目を舐め始めた。

れろれろれろ……っ♡♡♡

「……っ、やあっん……♡！ 待つ、イってる、からあ……♡！」

「ん♡ イってるおまんこ舐められんの気持ちいいよねー？」

「やあんツ♡ あっ♡ 気持ちよくて、やだあ……っ♡ おかしくなっちゃう、ああん♡」

「ん、はあ、ぬるぬるやば……♡ 奏乃ちゃんのおまんこ舐めまくってんのに、ぬるぬる舐めきれないわ」

「やあんッ♡ あつ、はあん……っ♡ 気持ち、い……♡!」

「ん、可愛い♡ ね、史斗もちゃんとおまんこ舐めてくれんの？」

「……っ」

「ね、教えてー？ このえろまんこ、舐めてもらってんの？」

「………っ、とき、とき……!」

「ははっ、時々？ こんな可愛いえろまんこ、俺ならえっちのたびに舐めたいけどなー？」

この行為がこんなにも気持ちいいなんて、全然知らなかった。どうしよう、こんなに気持ちいいことを知ってしまったて、おかしくなりそう。

柊哉さんの顔はスカートで隠れて見えなかったけど、じゅるじゅるとクリを吸われる音がして、声が止まらなかった。

「はあっ……♡! あ、だめっ♡ クリだめ……♡!」

「ん♡ クリ吸われて腰浮いちゃうね♡ 舐めやすいからいいけど……、ん、はあ……」

「ああっ、ん♡ きもち、いっ……♡ 柊哉、さんっ……♡ あっん♡！ や、またイっちゃう……♡！」

「っは、またいくの？ マジえろまんこじゃん♡ イって？ ほら、イって♡」
 「やんっ♡ あっ、ああっん♡！ イっちゃう……っ♡ ああん……っ♡！」
 「……は、すーご、またイけてえらいね♡ ……、あー……、このえろまんこに挿れて……」

半ば独り言のように柊哉さんは呟いて、指を抜き差しする。いったばかりなのに、せがむみたいにその指を締め付けてしまった。

「ああん……♡！ あっ……♡！」

「こんな指じゃなくて、ちんこ欲しい？ 俺のちんこで突かれるところ想像して、おまんこひくひくさせてんの？」

「……っ！」

カチャカチャ、と聞こえたベルトの音に視線を向けると、大きく反り立った柊哉さんのそれが目に映る。比べるのもどうかと思うけど、史斗のより大きくて、あんな大きいので……、なんて考えてしまった。

「そんな目で見ないで？ 奏乃ちゃんのえっち♡」

「あ……っ」

「足閉じて後ろ向いて？ ん、大丈夫、挿れないから」

挿れないのに……？ と思いながらも、後ろを向いて四つん這いになると、大きな手で、ぐっと腰を掴まれる。見えない不安が、何かに期待して濡れてしまう気がした。

「奏乃ちゃんのえろまんこで、俺の挟んで？」

「あっ……♡」

太ももと割れ目に柊哉さんの硬いそれを感じて、ゆっくりと擦られていく。濡れ

たそこは滑りが良くて、柊哉さんが腰を動かすたび、クリも擦れてしまう。

（なにこれ、入っていないのに、えっちしてるみたいで気持ちいい……♡）

「ああん……っ♡」

「はあ、あー、すご、奏乃ちゃんのおまんこぐちゅぐちゅだから気持ちよすぎ……」

「あつ、ん……♡！ 私も、きもち、」

「ははっ、彼氏のお兄さんにえっちなことされて、気持ちよくなっちゃってんの？」
「……っ」

「いけないんだあ、お兄さんのちんこでおまんこぐちゅぐちゅされて、気持ちよくなっちゃってるんだもんね……」

「や、あん……♡！ あ、待つ、そんなに速くしちゃ、だめ……っ♡」

柊哉さんの腰の動きが速くなり、挿入されていると錯覚するくらいに、擦れるそこが熱くてぐちゃぐちゃで気持ちいい。パンパンと肌がぶつかる音も、強く腰を掴む手も、全部、いけないことなのに。

(あ、だめ♡　ぐちゅぐちゅ気持ちいい……♡！)

「だめじゃないでしょ？　っはあ、気持ちよくなってるくせに、嘘つくたって」

「あつ、ああん……♡！　ん、きもち、あつ♡　ああ……っん♡！」

「ちんこ入ってないのに、っはあ、気持ちいいんだ？　じゃあちんこ挿れたら、やばいんじゃない？　ほら、奏乃ちゃんのおまんこに、お兄さんのちんこ入っちゃいそ」

「あつ、ああん……っ♡！　だめ、ああんっ♡！」

先端が入り口を引っかけるように擦られて、ひくひくと震えてしまう。だめ、だめなのに、

「あつは、ちんこ欲しいね？　ぐちゅぐちゅまんこ、ひくひくして可愛いね♡」

「あ、んう♡　や、また……っ」

「っは、まーたイきそーになってるの？　ほんとえろまんこになっちゃって可愛い

♡ 何回でもイきな？」

「んんっ♡！ あっ、だめだめっ♡ あ、柊哉さ、んっ♡ いやあ……っ♡！ またイクっ……♡ イクイクっ……♡♡♡！」

「ん、俺もイきそ、っはあ、ほら、ちゃんと挟んで、っ」

「あッ♡ ああんっ、きもち、あっ♡ ああっ、だめっ、イっちゃう……♡！」

「っはあ、イけよ、ほら、俺のちんこで突かれるとこ想像してイけっ……っ」

「……っ♡♡♡！ やんっ、イクっ、イク……♡！ やああん……♡！」

「は、っあ、出る……！」

（柊哉さんに突かれて、イっちゃう……♡♡♡！）

本当に中を突かれてイってしまったみたいに気持ちよくて、ひくひくと震えるそこが熱くて何も考えられない。柊哉さんのそれが太ももの隙間からにゆる、と抜かれ、その刺激にも体が跳ねてしまった。

起き上がって呼吸を整えようとするけれど、力が入らずに床に横になることしかできなかった。

「はは、いきすぎて力入らない？」

ベルトを締めながらそう言う柊哉さんは、額から少し汗が滲んでいたけれど、すっかり服も整えられていて乱れていなくて、何も無かったくらいに思える。「パンツ履かないとね」と、ティッシュをとって、柊哉さんは私の濡れたそこを優しく拭いた。

「やっ……ん！ 大丈夫、です……っ！」

「ん、いいから。ほら拭かないと、こんな濡れてんのにパンツ履けないでしょ」

「そう、ですけど……っ、ん」

「可愛い声出さないの。マジでちんこ挿れなくなるでしょ」

それとも、と柊哉さんの手が止まる。だめ、考えちゃだめ、絶対。

「奏乃ちゃん」

柊哉さんが私に覆い被さり、ぐっと顔が近づく。すごく、えっちな目をしてる、なんていうのは気の所為なのだろうか。

「もうすぐ史斗、帰ってきちゃうね？」

「あ……っ」

「そんな顔してたら、俺とえっちなことしてたのバレちゃうよ？」

「……っ」

「おまんこも、こんなぐちゅぐちゅにしてたらだめでしょ？」

「やあん……っ♡！」

（触れたらまた気持ちよくなっちゃう……♡！）

「あーあ、拭いたのに、ちょっと触ったらまたぬるぬる……♡ 奏乃ちゃん、マジえろまんこすぎ」

「あっ、あん……♡！ だめ、柊哉さん……っ」

「だめだめ言って、おまんこぐちゅぐちゅに濡らしてんだもんね？」

入口を擦って入りそうで入らない指も、いったそこそこには刺激は充分で腰が浮いてしまう。柊哉さんはひどく楽しそうに私を見下ろして、ゆっくりゆっくりと指を滑らせる。

「あんっ……♡！ あ、だめ……っ♡」

「そーだね、だめだねー？ 彼氏のお兄さんにえろまんこぐちゅぐちゅにされて、ちんこ欲しくなってるもんね？」

「や、あ……っ！」

「ほんととはこんなにあろまんこだったから、いつも物足りなかったんじゃない？」

「柊哉、さん……っ！ あ、もはやめ、て……っ！ ああん……っ♡！」

「っは、可愛い♡ たくさん気持ちよくなれてよかったね」

ピン、つとクリを弾かれて甘イキする私を見て、柊哉さんは笑ってこめかみにキスを落とした。

「残念だけど、史斗帰ってくるからねー。ん、おしまい」

くったりとする私をそのままに、テキパキとそこを拭いて下着を履かされる。腕を引かれて起こされると、乱れていただろう髪を整えるように柊哉さんは私の頭を撫でた。

「んー……、さすがに史斗にその顔で会ったらバレるかもね？」

「えっ……」

「はは、だってそんなえっちな顔してたらおかしいでしょ」

「や……っ！」

「車で送ってあげるから帰んな？ 史斗には、具合悪くなったって言っとく」

「……」

ほら、と柊哉さんに支えられて立ち上がると、少し足に力が入らずによろけてしまつて、柊哉さんが抱き止める。こんな風になるなんて初めてで、恥ずかさにぎゅつと目を閉じる。まだ下着の中はぐずぐずになっていて、熱い。

「大丈夫？ 歩けそう？」

「ご、ごめんなさい……」

「……、奏乃ちゃん、お兄さんと『いけないこと』しちゃったね」

「……っ」

顔を上げて見えた柊哉さんの表情は、正直何を考えているか私にはわからなかった。

いけない、こと。

明日は学校が休みだけど、次に史斗に会うとき、私はどんな顔をしたらいいたろう。こんなこと、言えない。でも、隠し続けるなんて。

「俺が誘ったんだから、俺のせいにしていーよ」

「えっ……？」

「俺が奏乃ちゃんに興味あったからさ、俺が悪いの」

「そんな、」

だって、悪いのは私、なのに。

「あ、でも」

背中を支えていた柊哉さんの手が、ゆっくりと下へ降りて、そつと腰を撫でる。制服越しなのに、びくりと腰が跳ねて、柊哉さんは小さく笑った。

「今日の続きは、奏乃ちゃんから誘ってくれたらしょっか」

待ってるね、と笑う柊哉さんに、私は頷くことも、首を振ることもしなかった。